

CARREL

キャレル

2023
Vol.356
定価 550 yen
12

もっと深く、もっと豊かに
新潟ライフを輝かせる

新潟の居酒屋は、
県外の人にも
自慢できる。

ご酒 新潟の
ば場の
んで。

卷頭特集

キャレルインタビュー●
沢口 靖子さん(俳優)

シリーズ特集●
人生の先輩に聞く、「はたらく」ということ。男性編

はたらく。特別編

クッキング●
調味料を使い切る「オイスターソース」

ゼロからの菜園生活●イチジク

シリーズ特集●ひとりで豊かに新潟で暮らすには
おひとり同士委員会【その四十四】
おひとりの老後の不安は?

特集●
年に2日間だけ。
上越の特別な餅菓子とは?

**謙信公の
勝負めし。**

新潟の酒場はんて。

卷頭
特集

「今度遊びに行きましょうよ」は
新潟ではイコール「飲みに行こう」を
意味することが多い。
それほど、お酒が大好きな新潟県人。
そんな新潟の人たちが
若い頃から通う酒場といえば「居酒屋」が
実はその「新潟の居酒屋」が
県外の人たちから
とっても平判が高いって二字じですか。

県外の人 「新潟に遊びに行くから おいしい店教えて」と言わわれると

新潟県の居酒屋は、
新潟人の「誇り」です。

県外の人は地元の居酒屋に
感激すること、多いんです。
県外から来たあるファミリーが言っていたのが
「気軽に入れて、新潟の地酒やうまい刺し身、
タレカツやラーメン、新潟の季節の総菜もあって
しかも値段もお手頃で、お店の人も優しくて
子ども連れでもいい雰囲気なんて
新潟の居酒屋っていいですね!」という言葉。
そういえば、昔ながらの居酒屋さんには
おじいちゃんから孫と二世代で
夕ごはんを兼ねて来ている人も多い。

地元民にとつては、
あまりに身近で普通だから
その魅力に気付かないことは多いもの。

おいしいごはんも、おいしい酒も飲める。
新潟の居酒屋は、
実は新潟人が誇れる存在なんです。

特集・年に2日間だけ。上越の特別な餅菓子とは？

腹減つては
戦はできぬ。

謙信公の勝負めし。



上越市高田・直江津で2日間だけ
販売されるあん餅があります。
それは戦国時代の名将・上杉謙信公に
ゆかりある特別な和菓子。
謙信公の心を伝える「食」を
ほんの少しご紹介します。

一 川渡餅

(かわたりもち)

つきたての餅をこしらんやつぶ
あんで包んだ餅菓子。その由来は
1561年の川中島の戦いで、上
杉謙信公が合戦の前夜、将兵に餅
を振る舞い、士気を上げ、夜中に川
を渡つたといいう故事にちなんだも
のだとか。春日山城下の高田地区
で謙信公の武勇にあやかり昭和初
期にはもう食べられていました。現
在では高田と直江津地区のはば
全ての和菓子店が作り、11月30
日、12月1日の2日間限定で販売
される。無病息災を願つて食べる、
地域の冬の風物詩となつている。



上越の人たちが
一年に2日間だけ
食べるあん餅。

上越は個人的に好きな土地の
ひとつ。上越の人は、明るく気さ
くで、でも一本筋の通った、氣骨
ある人が多いよう思つ。食事や
お酒を一緒にすると、高田や直
江津、妙高とそれぞれ出身は違つ
ても、折りにふれて出てくるの
が、「人のために、尽くす」という
言葉で、これは男性だけではなく
女性の方からもよく聞いた。最
初は少し不思議だったが、いろん
な人からの言葉を聞くうち
に、「上越の人は、みんな心の中に
謙信公がいるのかな」と思うよう
になつた。

ちょうど今から1年前、「あん
餅」自身は質素を好んだが、
これがとてもうまいと感心した。

取材で県内を回つてみると、同
じ新潟県といつても、町それぞれ
でやっぱり違うなあと感じるこ
とがよくある。景色や町の雰囲
気であつたり、食文化やスーパー
に並ぶ品であつたり。けれど一番
はやっぱり「人」と「風習」で、地元
の人にとっては当たり前のこと
も、よその人間としてはへえつと
思うことが多く、それを調べてい
くと、土地の歴史や文化がほんの
り見えてくるのがたまらなく面
白い。

上越は個人的に好きな土地の
ひとつ。上越の人は、明るく気さ
くで、でも一本筋の通った、氣骨
ある人が多いよう思つ。食事や
お酒を一緒にすると、高田や直
江津、妙高とそれぞれ出身は違つ
ても、折りにふれて出てくるの
が、「人のために、尽くす」という
言葉で、これは男性だけではなく
女性の方からもよく聞いた。最
初は少し不思議だったが、いろん
な人からの言葉を聞くうち
に、「上越の人は、みんな心の中に
謙信公がいるのかな」と思うよう
になつた。

宗教家でもあつた上杉謙信公
は、「義の心」、人として正しく生
きることを大切にした武将だ。

謙信公自身は質素を好んだが、
これがとてもうまいと感心した。

ここぞという戦の前は家臣にう
まいものを存分に振る舞つたと
も聞く。今、こんな時代だからこ
そ、あらためて上越に残る食を
通して、謙信公の心にちょっと触
れてみたいと思う。

はたらく。

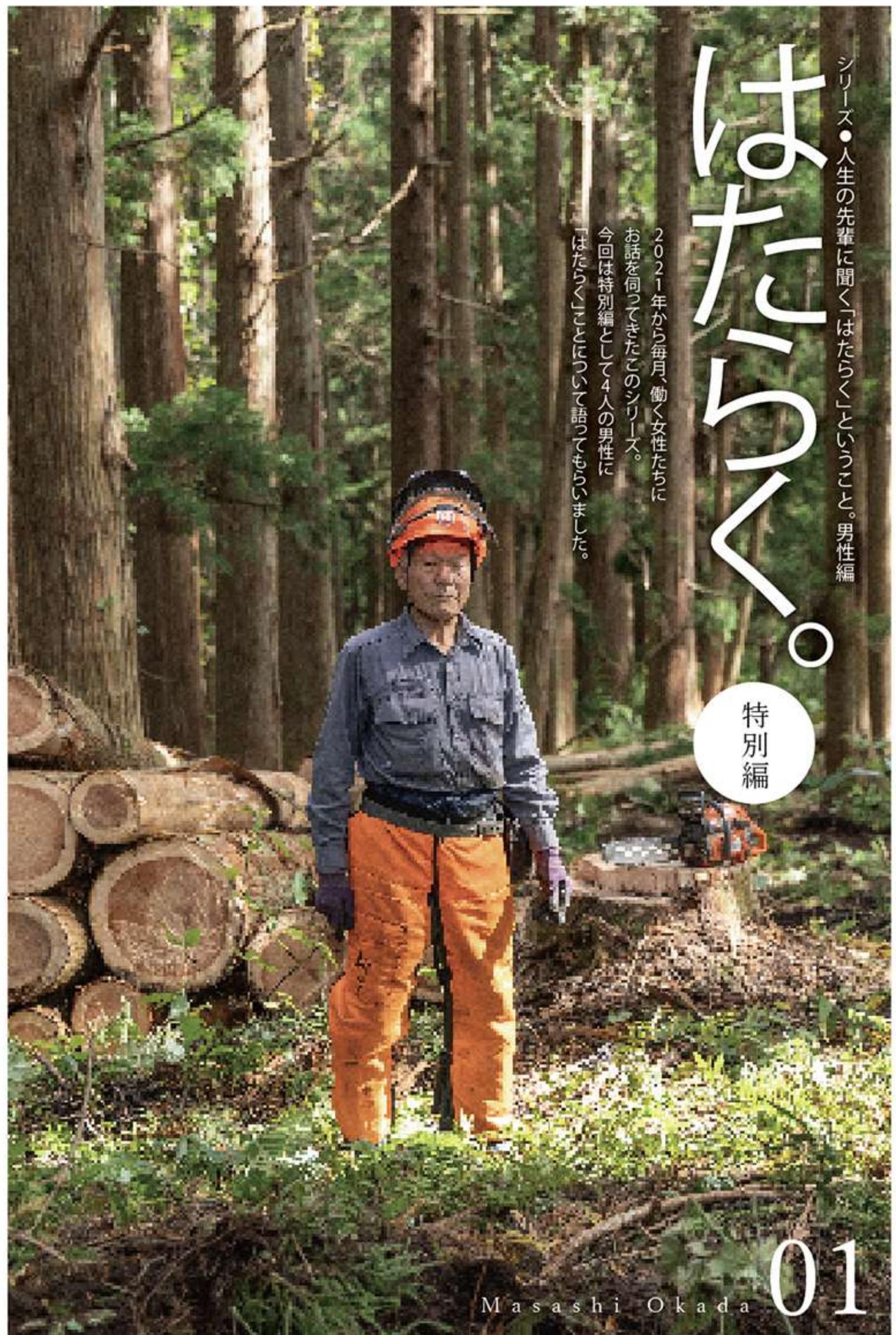
特別編

2021年から毎月、働く女性たちに

お話を伺つてきましたこのシリーズ。

今回は特別編として4人の男性に

「はたらく」ことについて語つてもらいました。



Masashi Okada

01

ここ上越市中郷区の岡沢集落で、私は生まれ育ちました。私の父は炭焼きや山の木の伐採の仕事をしておりましてね。その頃は父に限らず、岡沢集落は山で働く人がいっぱいいたんです。

私が最初に就いた仕事は電気屋でした。次男でしたので東京へ働きに出たんです。結婚してしばらくして、実家を継いだ兄が亡くなり、実家に戻つて父と一緒に林業の仕事をすることになりました。その後、27歳の時に声を掛けられて地元の森林組合で働き、58歳まで勤めて独立。時は妻も含めて6人の従業員がいたのですが、今は私と同年代の雇用者2名と一緒に働いています。もう仕事をやめてもいい年なりましたが、必要とされているうちはもう少し続けようかなと思いましてね。そうですね、山に恩返ししているような気持ちですか。

山の仕事も時代と共に変わりました。紙の需要が増えた時は広葉樹を伐採してパルプ材にしてね。森林組合に入つてからは杉の植樹。植樹後は木の成長を阻害する雑草木を刈り払う「下刈り」、雪圧で倒れた幼齢木を起こす「雪起こし」、木の成長を見ながら過密になきた木を切つて間引く「間伐」など、木の保育作業も大切な仕事になりました。当時植えた杉が50年経つて成長し、今やっているのはその木をさらに大きくするための最終段階の間伐です。これが私の最後の仕事になるのかな。この木が戸隠の杉並木のように立派に育つところを想像するとうれしくてね。その時私はもうこの世にいませんけど、私の仕事はちゃんと残りますから。

森林組合にいる時から私は岡沢集落の山林担当でした。当時、岡沢の山には車が通れる道がなく、林道網を作ることから始めたんです。といっても、山は細かく所有者が分かれている、どこに道を切るかを考えたら、次は山の所有者に「木を切つて道を作りたい」とお願いに行かなければなりません。100軒くらいは回ったかな。岡沢集落の人たちは理解よく、反対する

人が一人もいませんでした。しかも林道は買収ではなく、無償提供。それでも「道ができるば自分の山にも入りやすくなる」と皆さん快く協力してくれたんです。

林道網ができ、車が入れるようになつたことで、山の整備も進みました。山がきれいになるとクマも民家には降りてこないんです。動物と人間の住み分けができますからね。田んぼの用水路が杉の枝で詰まるのもないし、山を整えることは山里の暮らしを守ることにもつながります。それにその林道を使ってスノーモービルを楽しむ若い人たちが都会から移住してきます。今、空き家に移住者が12~13組暮らしてます。みんなで酒を飲みながら今度はクロスカントリーのコースを作ろうかつて話してますよ(笑)。住民同士が山でつながつて、集落がどんどん面白いことになつていつたのは、予想もしてなかつたですね。

本期は11月で間伐の仕事が終わり、雪が降つてからは少し体を休めることにしています。夫婦でスノーモービルを楽しむ事もあるんですよ(笑)。そして、春先、まだ雪がある3月くらいからまた林業の仕事が始まります。沢があつたりして地形の悪いところも雪を利用すると重機が入りやすく、春先の雪は締まっているので重機が沈まないんです。

仕事をしてよかつたことですか? 木が成長していく過程を見ることも、きれいになつた山を地元の人や移住者が喜んでくれることもうれしいですよ。でも一番大事なのは、これまで大きな事故がなかったこと。山の仕事は危険が伴うもので、こうして元気に山で仕事をしてこられたことは本当に幸せでした。後は山を任せられる若い人たちが出てくるといかなと思ってます。今、林業に興味を持つてもらうための見学ツアーを定期的に行つたり、子どもたちに間伐木材を使った制作体験会を開いたりしてね。山だけでなく、山の仕事を引き継いでくれる人を育てる